



完成したカレーライス



カレーのごはんを泡で作り始める子ども



カレーライスの野菜を切る子どもたち

CASE 1 5歳児



カレーライスを作ろう

(幼児の実態)

協力園
別府市立
緑丘幼稚園

6月になって、自分から好きな遊びを見つけて遊び始める子どもが多くなりました。
泡作りでトロトロの泡を作ろうと泡立てたり、野菜を切ったり、すりおろしたりすることそのものを楽しんでいます。
その野菜を料理に見立てたり、お皿に飾ったりするなどの目的はまだ、もっていないようです。

「この日のまま」とコーナーでは、保育者が野菜を切ることを楽しんでいる子どもたちに「昨日の夜、何食べたの？」と、投げかけると、A児は「カレーライス。」と答えました。保育者は「お母さんがそうやって作ってくれたんだね。トントントンって。」家庭の夕飯を作っているような雰囲気、情景を思い出せるようなトントンというまな板と包丁の音も加えて語りかけていました。そして、子どもたちと一緒に足りなくなった野菜を確かめ、「これはパプリカだよ。」と珍しい野菜の名前を言いながら、ジャガイモ、ニンジンなどの野菜も補充をしています。

保育者の話を聞きながら、無言で野菜を切っていたA児は「カレーライス作る？」と、一緒に野菜を切っていたB児に言います。パプリカ、ジャガイモ、キャベツ、ニンジンと切ると鍋に入れ、ペットボトルに水を汲んできて玉じゃくしで混ぜながら野菜を加えていきます。

少し後に同じテーブルで遊び始めた子どもたちも同じように鍋に野菜や水を入れて遊び始めました。最初は二人だったのが、あつという間に5、6人が集まり、ままごとコーナーのテーブルを囲みました。

A児は、周りの子どもたちには目もくれず、黙々と野菜を切っていました。A児は「やっつと、カレーができた！」
「でも、お米、どうしよう。」と困ったように呟きました。そして、お皿を持ってくると、カレーのルーをよそいました。保育者にも「カレーはできたんやけど、お米がでん。」と話します。

「ごはんね、どうしようかね。」保育者はA児の話を聞き一緒に考えます。しばらくしてその様子を見ていたB児が「泡で作る？」と、A児の困りに答えると、A児は「あつ、そうだね！」と、泡で遊ぶコーナーに行き、泡の作れる道具一式持ち込み泡作りを開始しました。

真っ白な泡ができると、ルーの入ったお皿にそつと入れ、保育者に持ってきていきます。「やっつと、できたわ。先生、食べて。」と、スプーンも付けて。

「わー、本当にカレーライスだ！」と、喜び保育者と、「カレーライスが出来たね！」と認める保育者。A児は、満足げにニコツと笑いました。

遊びの区切りがあった遊びのコーナーから片付けを始めます。泡作りのコーナーでは、片付けの時に子どもが泡に手を入れて、手で作ったストローにフーと息を吹きかけている場面に保育者がいました。保育者も一緒に遊びながら、「明日は、大きなシャボン玉になるといいなあ。」と話していました。

この時の保育者は、片付けの中で、『明日はどんな遊び方をするのか』という子どもたちの思いや願いを膨らませながら、今日の遊びを明日に繋げようとしていました。

思考力を育む環境構成のポイント

- いろいろな野菜を子どもが切りやすいように準備し、自由に使って試せるようにする。
- 子どものイメージが湧きやすい材料や道具をいつでも選んで取り出せるようにしておく。
- 子どもの困ったことを一緒に考え、子どもが体験とつないで考えられるような雰囲気づくりをする。
- 子どもたちと一緒に片付け、遊びやすい片付け方に気付かせたり、明日の遊び方を聞いたりして、今日から明日の保育に繋がるようにしていく。

事例から見られる10の育ち 自立心

「野菜を切りたい」という気持ちで、自分で取りたい野菜を選び、お皿に盛り付けたい。保育者が「自分で切りたい」という気持ちを尊重し、自分で切りたい野菜を選び、お皿に盛り付けたい。保育者が「自分で切りたい」という気持ちを尊重し、自分で切りたい野菜を選び、お皿に盛り付けたい。

事例から見られる10の育ち 思考力の芽生え

野菜を切ることを楽しみながら、保育者の話を聞きながら、無言で野菜を切っていたA児は「カレーライス作る？」と、一緒に野菜を切っていたB児に言います。パプリカ、ジャガイモ、キャベツ、ニンジンと切ると鍋に入れ、ペットボトルに水を汲んできて玉じゃくしで混ぜながら野菜を加えていきます。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにする。